

『特攻体験と戦後』

2014年08月29日

島尾敏雄氏と吉田満氏の対談『特攻体験と戦後』の新編が、今年の7月に出版された。二人の対談は1977年に行われ、『文藝春秋』に掲載され、翌年「中央公論社」から単行本で刊行された。新編には、刊行後に書かれた数名の解説が加えられている。

島尾氏は、九州大学を繰り上げ卒業し、海軍兵科第三期予備学生となる。奄美諸島加計呂麻島に行き、震洋隊指揮官となり、特攻訓練と指導に当たったが、出撃は一度もなかった。特攻命令が下り、待機していた時に終戦を迎える。

吉田氏は東京大学を繰り上げ卒業し、学徒出陣により、海軍兵科第四期予備学生となる。戦艦大和に副電測（レーダー）士として乗り組み、沖縄特攻作戦に参加し、数少ない生還者になった。生還後、高知県須崎の人間魚雷基地の勤務を希望し、終戦を迎える。そして、名著『戦艦大和ノ最期』を著している。吉田氏はカトリックで洗礼を受けたが、プロテスタントに代わった。私は神学生時代、鈴木正久牧師が牧する西片町教会に通っていたが、吉田氏が礼拝に出席していた。『戦艦大和ノ最期』の著者として、尊敬を持って見ていた。挨拶を交わすくらいであったが、温和な人であった。

特攻を命じられた極限を体験した二人は、時代を共有し、同じ境遇を生きた者として、共感するところが多かったのであろうか、淡々と話し合っている。死へと追いやられていく状況と敗戦で味わった虚脱感は、私には到底理解できるものではなかった。

島尾氏は「しかし、戦争というのは、ほんとうに、ぼくは虚しいと思うね。そして、特攻というのも、そのような戦争の中での一つのやり方だと思うけれども、やはりぼくは、ちょっとルールがどこかはずれているような気がするね。（中略）特攻は、もうとにかく、最後のところまで、なんというかね … そうじゃなくもっと気楽に … 戦争を気楽にするというもおかしなものだけど … 。最後のものまで否定してしまわないで … 。」と語っている。吉田氏は「いまの若い世代の人でも、観念的には戦争の悲劇性ということについてのけますけれど、観念だけではなく、それはやはり裏付けを持つという意味で、わたしなんかは、そういう全体を含めた戦争の悲劇の大きさというか、深さというか、そういうことを事実として書いていく必要があるんじゃないか、と思っています。何であろうとも、それ全体が虚しいということですね」と語っている。二人の抑制された言葉は心に深く残る。

本の最後に、文芸評論家の加藤典洋氏が「解説 もう一つの『0』」を書いている。百田尚樹氏は、特攻隊の父祖の生き方を探り『永遠の0』を書いて、本屋に山積みされているベストセラー作家になった。映画化され、多くの人の感動を呼び起こしているらしい。「憲法改正と軍隊創設」を主張し「南京虐殺はなかった」と述べている。NHKの経営委員にもなっている。『永遠の0』は戦争賛美であるとの批判に対し「特攻を断固否定した」「戦争を肯定したことは一度もない」「できるだけイデオロギーを入れなかった」と言っている。島尾氏と吉田氏の特攻体験から「感動」に結びつく物語は生まれてこない。『特攻体験と戦後』と『永遠の0』の違いはどこにあるのか。加藤氏はそれを、今の問題として問うている。特攻からは「感動」などはなく、寂寥感と言ひ知れぬ怒りが込み上げてくる。彼らを死へと追い込んだ全体像を解き明かすことが、戦後の責任ではないか。